

この街で目を引いたのがペンキ塗りの男たちだ。真っ白なつなぎを着て仕事する姿が粹でかっこいい。ドアや窓枠に幾度となく塗り重ねられ、ぶ厚くなったペンキのマティエールの魅力的なこと。周りの石壁に負けない、たくましくためられないのない刷毛の跡。そこには、日本人のこまやかできれいな仕事とはまた違う力強さがあった。

この国ではペンキ屋と絵かきは同じ塗り手、パントル (Peintre) と言う。彼らは塗ることで誇らしく職人としての役目を果たし、暮らしの糧を得る。役目もなくパンのために描くわけでもない、自分の内だけで塗り続ける僕は、そんな彼らをフト羨望する。画材店にも行ってみた。医者そっくりの白衣を着た

店員が、おもむろに対応するのが物珍しかったが、筆一本買うでもなく冷やかしただけ。それどころか、絵かきであるくせにスケッチすらせず、飲み屋で酔い心地になると田中スナオさんと落書きし合い、居合わせたらアラブ人や？人らと絵で話をするばかり。褒められることではない。

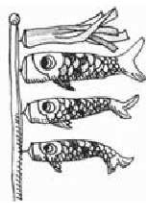
### パリ追想1981 Ⅲ

6月のパリは日が長く、

9時を過ぎても明かりが残る。通りでよく見掛けるのが年配のアベックである。夫婦なのか恋人同士なのか。夕刻から夜に向かうひとときを、ゆっくりと慈しむように歩いている。かと言って、もたれ合った感じもなく、ちよっとした手を添える仕種にも、互いを尊

重しいたわり合っているのがうかがい知れる。

気難しい顔にも、ほほ笑みにも、これまでの長い道のりをじっと確かめるような、清閑とした落ち着きが漂う。そのころの日本では滅多に見られない晩年のかたちがあった。街のざわめ



きすらも、人生の最終章を迎える人たちを包容し、静けさを破る気配はない。

この1カ月、パリは暑くも寒くもなく快適な季節だった。空は曇り小雨が降るが、決してどんよりとはしておらず、湿気のない澄んだ灰色にすっぽり包まれ

た、うわつかない、ぎらつかない、シックな街であった。この地に住む人がつくった美しさなのか、この空がつくらせたものなのか。

僕は初めての異国にたっぷりと浸り謳歌した。そして、おそらくは多くのものを受け止めた。いわゆる観光などせず、旅をする意味においてイメージし求めていた「感覚を研ぎ澄ましてガラガラする」という思い通りの日々を持たせてくれたのは、センスの波長がピッタリ合っていた彼のおかげであった。

歳も近く、唯一絵かきの友人であり続けたスナオさん。遠く離れていても互いに大切な存在となっていたが、長い間会わないままに2013年、僕の誕生日の日にパリで客死した。

(吉田 淳治・画家)